

義経記の擬音語・擬態語

—太平記との比較を中心に—

中 里 理 子

1. 本稿の目的と方法

『義経記』は室町中期に流布本が成立したと考えられており、中世後期の軍記物語に当たるが、内容からは「合戦記述よりも、義経という個人の行動や運命を語ることに主眼があり」、「軍記に准ずるものとして准軍記と呼ぶのがふさわしい」と評されている¹。筆者はこれまで、『平家物語』（覚一本、延慶本、百二十句本）や『太平記』などの軍記物語を取り上げ、そこに見られる擬音語・擬態語の特徴を見てきた。本稿では、『太平記』を中心にこれらの軍記物語と比較しながら、『准軍記』である『義経記』に見られる擬音語・擬態語の特徴をまとめる。『太平記』との関連については、藪本勝治 2014 が場面の類似性から『太平記』から『義経記』へという影響関係があると論じているが、擬音語・擬態語においてどのような影響関係があるのかを見ていきたい。

『義経記』の文章については、古くは市古貞次 1938 が流布本を対象に、俚諺や地口が多い等のいくつかの特徴を挙げている²。「俗語の使用、口語脈の多分なる注入」「語彙が豊富であったとは決していへまい」など

1 成立時期以下「准軍記」に関する記述は『日本古典文学大辞典』「義経記」の項(118～120頁)による。執筆は梶原正昭。

2 山本吉左右 1968 では、市古貞次が挙げた特徴を「1 俚諺、地名尽くし、地口警句に富んでいること」「2 俗語の使用や口語脈の注入が多いこと」から「7 合戦の描写がそれぞれ酷似していること」「8 語彙が貧弱であること」まで、8項目にまとめている。なお、7の「それぞれ」とは、曾我物語と比較した記述と思われる。

の特徴が、「平俗で、親狎しやすく、類型的、稚拙で、抑揚に缺け」という文章の印象に結びついているという。また市古貞次 1959 は、子供向けの『義経記』の紹介文中で、「卷八の弁慶が衣川で奮戦するところ」を挙げ、「勇ましい戦いぶりがよく書かれています。『がはと』『はらりはらりと』『はたと』『ふつと』などということばがたくさん出て来るとも注意してください」と書いており、擬音語・擬態語の効果に注意を促している。しかし、その後『義経記』の文章・文体に関する研究は進められていない。利根川清 2003 の研究展望を見ると、『義経記』の研究は、主に諸本研究、成立論、作品論、人物論、伝承研究等において進められており、文体や語彙に関する論考はほとんど見られない。この傾向は現代まで続いていると見てよいだろう³。『義経記』に見られる副助詞を論じた田中敏生 2004 のように、室町時代の語法研究の調査対象として取り上げたものはあるが、『義経記』の語彙の特徴について論じたものは管見の限り見られない。

『義経記』の文章は、野中直恵 1997 が冒頭でまとめているように、「多くの不整合が存在することから先行の義経伝承を『寄せ集め』たもの、時には『安易な合本版』などとも評されてきた」⁴もので、語彙や文章にもそれが現れていると思われるが、ここでは巻ごとの特徴を見ることはせず、全体の傾向を見る。

太平記を調査するにあたっては、田中本を底本とする小学館日本古典文学全集『義経記』を対象とする。田中本は「判官物語」系第二系列の伝本で、巻八の冒頭の一章を欠いているが、「流布本や古活字本と比較

3 利根川 2003 の調査は 1989 年 11 月から 2001 年 9 月のものであるが、その後も文体や語彙に関する研究は管見の限りほとんどない。

4 野中が「安易な合本版」としたのは、角川源義 1975 が「民間文芸として行われていた義経の物語群を無造作に合本した」と記述したものをまとめたと思われる。

して誤脱が少なく」「増補部分を推測することができるといわれる善本」⁵であり、義経記の研究者も多くこの本に拠っていることから、本稿でもこれを調査対象とする。

比較対象とする『太平記』の擬音語・擬態語はかつて筆者が調査した資料を用いる⁶。

なお、筆者は『太平記』の擬音語・擬態語調査において、従来扱われている和語系のものに加えて漢語系のものも含めている。漢語系の擬音語・擬態語とは「峨々」「満々」などを指す⁷。今回の『義経記』の調査も和語系に加えて漢語系のものも含めることとする。

2. 擬音語・擬態語の現れ方

擬音語と擬態語は、「長刀の柄をづんど斬りては落とされたる（巻二）」のように、音も様子も表していると思われる例があるため、本稿では区別せずに扱うこととする。『義経記』に見られた擬音語・擬態語の一覧は稿末資料に示した。

『義経記』の擬音語・擬態語は、和語系が異なり語数 69、延べ語数 221、漢語系が異なり語数 3、延べ語数 4 であった。これを『太平記』と比較してみたい。筆者の調査によると、『太平記』の擬音語・擬態語は、和語系のものが異なり語数 69、延べ語数 411、漢語系のものが異なり語

5 小学館『日本古典文学全集 62 義経記』（2000 年）の梶原正昭による解説、509～510 頁。諸本の系統については、佐藤隆 1999 を参照した。

6 天正本を底本とする日本古典文学全集『太平記』1～4（小学館）を対象とした。

7 漢語系のオノマトペは、漢字表記がなされる点で、言語音と意味内容に有縁性が感じられるという擬音語・擬態語の特質に該当しないということもできるが、漢語系の語が和語系の語に多大な影響を与えていること、中世・近世には日常語にも漢語がみられることから、一部を調査対象に加えている。漢語系の擬音語・擬態語は、金田一春彦 (1978) の分類 (4) に示されるようにいくつかの形式があるが、和語の形式に近い「漢字二字のもの」の中から「同じ語根を重ねたもの」（「満々」など）と「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」（「朦朧」など）を取り上げた。

数61、延べ語数104であった⁸。参考までに『平家物語』(覚一本)の擬音語・擬態語の数を示すと、和語系が異なり語数48、延べ語数235、漢語系が異なり語数20、延べ語数31であった⁹。

大きく異なるのは漢語系の語の数である。『太平記』や『平家物語』で見られる漢語系の語の多くは自然描写に用いられているが、自然描写に関して『義経記』では「峨々」2例、「満々」1例しか見られない。以下に例を示す。(文中の略と下線は引用者。以下同じ。)

例1 ある時は峨々とある巖石に向かひ駒に鞭を打ち〈中略〉ある時は漫々とある海上に風波の難を凌ぎ、(巻四)

例2 この愛発の中山と申ししは〈中略〉素直ならぬ山なれば、巖峨々として、何時見馴れ給ひたる事ならねば、(巻七)

軍記物語において漢語系の語は、例1のように対句を用いた漢文訓読調の部分に見られることが多い。『太平記』では漢文訓読調で書かれた箇所が多いのに対し、『義経記』では漢文訓読調の文がほとんど見られない。この文体差が、『義経記』に漢語系の語がほとんど見られない要因の一つであろう。『義経記』は島津久基1925の指摘にあるように、「軍記もの特有の和漢の故事傳説の講釈挿話の殆ど無い事」という特徴があるが、漢文訓読文体が少ないことと関係しているだろう。しかし、例2のように、漢文訓読調の文体以外の箇所で漢語系の語が用いられることもある。『太平記』には「峨々たる山の高峰に家々の旌四、五百流、雲

8 『太平記』では「えいや」を掛け声に近い語として擬音語に含めなかったため、これを入れると異なり語数が1語増え、延べ語数が数語増える。

9 平家物語の資料は、拙稿2012「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、覚一本、百二十句本との比較から—」の調査資料による。覚一本は日本古典文学大系『平家物語』上下(岩波書店)を調査対象とした。

に翻り日に映じて、粲然としてぞ見えたりける(巻七)」のように用いられた例があり、『平家物語』(覚一本)にも、「北の方やはら船端へ起き出で給ひて、満々たる海上なれば、いづちを西とは知らねども(巻九)」のように用いられた例がある。このことから、漢文訓読文体が見られないという理由に加えて、『義経記』では自然描写をする際に漢語系の語を使っていないということが挙げられるだろう。

和語系の語を『太平記』と比べると、延べ語数に差があるが、異なり語数にはほぼ差がない。『太平記』の本文が『義経記』の4倍近い分量である¹⁰ことを考えると、『義経記』にはさまざまな種類の擬音語・擬態語が使用されていると言えるだろう。また『平家物語』(覚一本)と比べると、『義経記』の延べ語数は少ないが異なり語数がやや多い。『平家物語』(覚一本)の本文の分量は『義経記』の2倍近い¹¹ことから、『平家物語』(覚一本)と比較しても、さまざまな種類の擬音語・擬態語が使用されていると言える。

稿末の一覧表からもわかるように、和語系には頻度の高い擬音語・擬態語がいくつか見られる。『太平記』『平家物語』(覚一本)も対象に、5例以上みられた擬音語・擬態語を抽出すると以下ようになる。(漢字や片仮名で表記された語も平仮名表記に統一した。語の後の数字は用例数である。)

【義経記】

がばと 17 かりと 6 さつと 7 するりと 14 ちやうど 8 つと 27
どうと / どうど 6 はたと 7 ひやうど 8 ふつと 9 むずと 16 ゆらりと 8

10 小学館の古典文学全集で『太平記』は4冊、『義経記』は1冊であることから概算した。

11 小学館の古典文学全集で『平家物語』は2冊、『義経記』は1冊であることから概算した。

【太平記】

あつと 6 からからと 15 きつと 28 さと 8 さつと 48 さらさらと 6
しづしづと 35 ちと 15 つと 9 つだつだに 7 どうと 46 どつと 14
はたと 6 ばつと 17 はらはらと 18 ひしひしと 12 ふと 5 ふつと 6
ほのぼのと 7 むずと 14

【平家物語覚一本】

きつと 13 さつと 7 ざつと 20 さめざめと 12 ちつと 6 ちやうど 7
つつと 19 どうど 9 どつと 20 はたと 8 はらはらと 32 ひやうふ
つと 5 ひやうど 6 むずと 16

これを見ると、どの作品も多用される語に多少の違いがあることがわかる。他の二書と比べて『義経記』に多く見られるのは、「がばと」「からりと」「するりと」「つと」「ひやうど」「ゆらりと」である。これらの語の多くは個人の動きとそれに伴う音を表現するものである。『太平記』において、軍勢の動きや音声を表す擬音語・擬態語が多かったことと対照的である。前項で見たように、合戦など集団の動きより、個人の動きに主眼があることが、擬音語・擬態語にも現れている。以下、頻度の高いこれらの語を中心に、義経記の擬音語・擬態語の特徴を見ていく。まとめるにあたっては、和語系の擬音語・擬態語に焦点を当て、個人の描写を中心に見ていく。

3. 個人の描写

『義経記』は、日本古典文学全集の解説によると「弓矢のいくさや騎馬の戦いを主体とする初期の軍記の場合と違って、太刀打ちの合戦がク

ローズアップされている」という¹²。擬音語・擬態語にもその特徴が現れているかどうかを見ていきたい。

まず個人の描写について、戦闘場面の武器に関する動きや音を表すもの、それ以外の個人の動きを表すものに分けて見ていく。

3.1 武器に関する動きや音

『義経記』では、上記の指摘のように太刀や長刀による打ちものの戦闘場面が多い。『太平記』と比べるために、太刀などの打ち物に関する擬音語・擬態語と弓矢に関するものを以下に抜き出す。

【義経記】

◎打ち物（太刀・長刀・鉞など）¹³

がしと(1例)－刀を合わす がばと(2例)－長刀を捨つ・突く
からりと(4例)－長刀を投ぐ・太刀を捨つ・太刀の股寄を鳴らす・
大太刀を投げかく
からりひしりと(1例)－鉞・薙鎌・熊手を船に取り入る
ずばと／づばと(2例)－太刀を抜く・刺し貫く
するりと(4例)－長刀を差し出だす・刀を引く・刀を引き廻す・刀を
通す
たぶたぶと(1例)－切る
ちやうど(7例)－斬る・打つ4・刀を合はす・突く
つと(3例)－打ち落とす・首を斬る・刀が通る
づんと(3例)－斬る2・切る はたと(3例)－斬る2・打ち割る

12 小学館『日本古典文学全集 62 義経記』の梶原正昭による解説、501頁。

13 川に流される弁慶を助けるために熊手を「総角にぐさと引っ掛け」の「ぐさと」や、木を割って柄にして腰に「みしと差し」の「みしと」のように、合戦に関わらなものは含めない。また「ふくふく打たれて」のように、打たれた側の音声も含めない。

ふつと (6 例) - 斬る 2・切る 3・押し切る

むずと (8 例) - 討ち入る・打つ 5・斬る・差す

◎弓矢

がばと (1 例) - 射倒す

からりと (1 例) - 矢を鐏元へ引き掛く

ちやうちやうど (1 例) - 弦打ちす

つと (2 例) - 射出す・射切る

はたと (1 例) - 射切る

ひと (1 例) - 射かく

ひやうど (8 例) - 射る 7・放す

ひやうどうと (1 例) - 射る

ふつと (1 例) - 射ちぎる

【太平記】

◎打ち物 (太刀・長刀・鉞など)

打くちやう>と (2 例) - 打つ 2

打々くちやうちやう>と (2 例) - 打ち当たる・打つ

◎弓矢

切々くきりきり>と (1 例) - 弓を引き絞る

ずぶと (1 例) - 射通さる

ちやうと (2 例) - 射る 2

はたと (3 例) - 射る 3

ふと (1 例) - 射通す

ふつと (1 例) - 射抜かる

ひやうと (3 例) - 矢を放つ・征矢を切つて放つ・射渡す

ひやうど (1 例) - 射る

二書を比較すると、太刀など打ち物に用いられる擬音語・擬態語は種類も数も圧倒的に『義経記』のほうが多い。『太平記』は「ちやうと」「ちやうちやうと」しか使われていないが、『義経記』では 13 種類の語が使われている。参考までに筆者が調査した『平家物語』(覚一本)では、「ちやうど」「はたと」「ふつと」「むずと」が使われていた。『平家物語』

(覚一本)と比べても、『義経記』は打ち物に関して多くの擬音語・擬態語が使われているのがわかる。「ちやうど」の使用例が多いのは『太平記』と同様だが、加えて「ふつと」「むずと」が多く見られる。以下に例を挙げる。

例3 いとど腹を立て、もつて開いてちやうど打つ。弁慶ちやうど合はす。 (巻三)

例4 彼処に追つかけてはふつと斬り、此処に追つ詰めてははたと斬り、枕を並べて三人は死ににけり。 (巻二)

例5 一刀にと思ひて、大太刀をもて開いてむずと打つ。 (巻二)

「ふつと」は『太平記』にも6例見られたが、「懸け抜く・懸け入る・吹き懸く・手縄の勾を切らる・胴を射抜かる・木の柄をねじ切る」など、太刀で敵を斬る例とは異なる用いられ方をしている。「むずと」は『太平記』に14例見られるが、「組む6・引つ組む3・攻む・軍勢を二手に押し分く・二手に分かる・兵が馳せ入る・兵が一手にあはす」という用いられ方をしており、その多くは『平家物語』(覚一本)の「むずと組んでどうど落つ」のように、敵と組み合う場面で使われている(語の後の数字は用例数。以下同じ)。『義経記』には敵に「むずと組む」という表現は1例もない。『太平記』とは擬音語・擬態語の用いられ方が異なっていることが見て取れる。また『義経記』の打ち物の表現には、「がしと」「がばと」「ずばと」「づんと」のような勢いのある力強い表現が増しており、また、「するりと」「つと」のような素早く滑らかな動きが加わっている。以下に例を挙げる。

例6 打ち損じたりと思ひて、走りかかりてまたむずと打つ。弁慶が

しと合はす。(巻三)

例7 〈前略〉寄り合ひてははたと斬り、ふつと斬り、馬の太腹をが
ばと突き、敵の落つところをば、打兜に長刀を突き入れて、首
を刎ね落とし、(巻八)

例8 〈前略〉膝を突き立て、居丈高になりて、刀を取り直し、左の
脇の下にづばと刺し貫きて、右の方の脇の下へするりと引き廻し、
(巻六)

例9 太刀は聞こゆる宝物なり、腕は強し、長刀の柄をづんど斬りて
は落とされたる。(巻二)

例10 藤沢入道長刀を茎長におつ取つて、するりと差し出だす。
(巻二)

例11 〈前略〉薙ぎ打ちにちやうど斬り給へば、切つ先の首の上にか
かるとぞ見えし、首をつと斬つて落とされけり。(巻二)

例に見るように、弁慶ら剛力の武士たちの力強い戦いぶりが、これらの擬音語・擬態語によって効果的に表現されている。

弓矢に関しては、射る様子はほとんど「ひやうど」で表現されており、それ以外は「射切る」「射倒す」など、矢が刺さる際の表現になっている。『太平記』もほとんどが矢を射る表現になっており、矢が刺さる際の擬音語・擬態語は『義経記』よりも少ない。『義経記』の「ひやうど」は「よく引いてひやうど射る」という定型的表現になっている¹⁴が、これは『平家物語』（覚一本）に多く見られた表現で、『太平記』にはほとんど見られなかった。

14 「よく引いてひやうど射る」2例、以下1例ずつ「よつ引き、ひやうど射る」「よく引き
てひやうど射る」「よ引いてひやうど射る」「よく引いて暫し固めてひやうど射る」「かなぐ
り引きによく引いて、ひやうど放す」「暫し固めてひやうど射る」となっており、ほぼ同じ
定型的表現となっている。

なお、敵と組み合う動きに関する擬音語・擬態語は、『太平記』では、「むずと」9例（組む6・引つ組む3）、『平家物語』（覚一本）では、「むずと」12例（組む9・とりつく・とってひきおとす・つかむ）が見られたのに対し、『義経記』では1例もない。これは、先に触れたように騎馬の戦いがほとんど描かれていないことによるものだろう。戦い方の違いが擬音語・擬態語にもよく表れている。

3.2 個人の動き

『義経記』で頻度の高かった擬音語・擬態語のうち、合戦以外の動きを表す特徴的なものに「がばと」「するりと」「つと」「ゆらりと」がある。以下に例を挙げる。

例12 御曹司、がばと起き、太刀取り直し、膝の下に押し隠いて、
(巻二)

例13 弁慶土佐坊を掻き抱き、鞍壺にがばと投げ乗せ、我が身も馬
の尻にむずと乗り、
(巻四)

例14 御曹司、縁にするりと上り、遣戸をさつと引き開けて、はば
かるところもなくつと入り、「これへこれへ」とぞ申しける。
(巻二)

例15 竹の末にがばと飛び付きて、相違なくするりと渡り給ひけり。
(巻五)

例16 御曹司、「彼奴は異の者かな」とて、稻妻の如く弓手の脇へつと
と入り給へば、
(巻三)

例17 築地よりゆらりと飛び下り給へば、太刀打ち振りて、つと寄り、
九尺の築地より飛び下り給ひけるが、〈中略：引用者〉また上に

ゆらりと飛び返り給ふ。

(巻三)

例 18 弁慶が大長刀を打ち流したる腕の上にゆらりとぞ越え給ひける。
(巻三)

「がばと」は稿末の表に示すように、「起く」3例、「倒る」3例の他、「投げかく」「投げ乗す」「乗り移る」「踏む」「飛び付く」など、勢いをつけた力強い動きに使われている語である。例 13 に「むずと」も使われているが、「がばと」「むずと」など、武士の力強い動きを表す擬音語・擬態語が多く見られるのが、『義経記』の特徴の一つである。これは、前項で打ち物を表す語に「がしと」「がばと」「ずばと」「づんと」という力強さを表す擬音語・擬態語が多く見られたことと同様である。

「するりと」「ゆらりと」は、「がばと」「むずと」とは異なり、滑らかさ、優雅さを表す語である。例 14、15 の「するりと」はいずれも義経の動きを表している。「するりと」全 14 例のうち 4 例が先に見た太刀に関わる動作を、10 例が人物の動きを表している。そのうち 5 例が義経の動作として用いられている。残り 5 例中 3 例は船を漕ぎ寄せる動きに、2 例は「落ちる」「下りる」動きに使われている。「するりと」は、水上で船が動く滑らかな動き、落下する際の素早い移動を表しているのである。これに対し、義経の動作を表す場合には、「入る・出づ・縁に上る 2・渡る」となっており、他の例とは大きく異なっていることがわかる。「するりと」は、通常の人間の動きに及びもつかないような、義経の滑らかで素早く軽快な動きを表現している擬態語であると思われる。「入る・出づ」という移動が他の人物に使われる場合には、「つと」で表されることが多い。「つと」は全 27 例中、打ち物と弓矢に関する例を除くと 22 例が人物の動作に用いられている。例 14・16 に見るように義経の動作に使われた例は 5 例で、残り 17 例は、弁慶、伊勢三郎、佐藤忠信など他の武士た

ちの「登り上がる 2・上る 3・御前に参る・入る 4・出づ 4・走り入る・立つ・寄る 6」様子を表している。『義経記』においては、ためらわず素早く動く様子を表す語は「つと」であり、義経の滑らかで素早く軽快な動きを強調する場合に「するりと」を用いているのであろう。『太平記』にも素早い動きを表す「つと」は 9 例見られたが、「するりと」は 1 例も見られなかった。『平家物語』（覚一本）では、「つと」が 3 例、「するりと」は 1 例もない。「するりと」は義経の動きを表す独特な擬態語であると言えるだろう。

「ゆらりと」は、全 8 例中 5 例が義経、2 例が弁慶、1 例が佐藤忠信の動きに使われている。稿末資料に示したように、「跳び上がる・飛び下る・飛び返る・超ゆ 3・下る・乗り移る」様子に用いられている。いずれも軽やかな跳躍力と余裕を持った動きを表現している。例 15・16 は弁慶に対する義経の動きであるが、身軽に飛び下り、飛び上がり、飛び越える様子が表されている。「ゆらりと」も「するりと」と同様に、滑らかで軽快な動きを表す『義経記』に特徴的な語であると言えよう。

4. 軍勢の描写

『義経記』には軍勢に関する擬音語・擬態語がどのように使われているかを、軍勢の動きと軍勢の音声に分けて見ていく。

まず、軍勢の動きを取り上げる。『太平記』では、軍勢が打ち寄せたり、懸け入ったり、引き分けたり、引き退いたり、あるいは相手の軍勢が左右に分かれたり、入り乱れたりする様子を表す擬音語・擬態語が多く見られた。その際に使われていたのは、「さと・さつと・ざつと・ばと・ばつと・ひしひしと・ふつと・むずと」という語であった¹⁵。一方、『義

15 これらの用例のうち、軍勢の動きに使われた用例数は、「さと」8 例、「さつと」39 例、「ざつと」1 例、「ばと」1 例、「ばつと」12 例、「ひしひしと」11 例、「ふつと」2 例、「むずと」

経記』において軍勢の動きを表す擬音語・擬態語は、「さと」3例、「さつと」1例、「むずと」1例のみであった。以下に例を挙げる。

例 19 〈前略〉川つら法眼これを聞きて、「まことや判官の御内には、
〈中略〉矢比に近づきては叶ふまじ」とて、三方へ向いてさと散
る。 (巻五)

例 20 土佐が真先駆けたる郎等、五六騎射落として、二人は矢庭に
失せにけり。土佐も叶はじと思ひけん、さつと引きにけり。
(巻四)

例 21 〈前略〉由利太郎、藤沢入道、大将として、その勢七人連れて
出で立ちけり。〈中略〉夜半ばかりに長者のもとにむずと討ち入り、
侍に斬り入りてみれども、 (巻二)

例 19～21 は軍兵の数が少ないこともあるが、軍勢の勇ましい動きを表しているとは言いがたい。『太平記』が軍勢の動きを生き生きと描写していたことと比べると、大きな違いが見られる。例 19 の「むずと」は、『平家物語』覚一本においては個人の動きにしか用いられず、『太平記』に何例か軍勢の動きに使われていたが、『義経記』でも複数の人数の動きに使われていた点は注目すべきであろう。

次に、軍勢の立てる音声を見ていく。『太平記』では、勝どきを上げる声や笑い声が擬音語で表現される例が多く見られた。関の声は「どうと」22 例、「どつと」9 例、笑い声は「どうと」6 例、「どつと」4 例、喚き声が「どつと」1 例であった。これに対して『義経記』では、関の

5 例であった。なお、「颯と」など漢字表記のものも平仮名表記に含めている。

声が「どうと」1例、「ばつと」1例、笑い声が「どつと」2例、おめき声が「わつと」1例であった。『義経記』が個人に焦点を当てていることが現れている。

5. 感情描写（泣く・笑う）

『太平記』や『平家物語』（覚一本）には、泣く描写と笑いの描写に関わる擬音語・擬態語が多く見られた。特に泣く描写の「さめざめと」「はらはらと」は多くの用例が見られ、笑いに関しては「にこと」「どつと」などが何例か見られた。個人と集団の描写に関して、『義経記』と比べると以下のようになる。

◎泣く描写

【義経記】さめざめと 3例 はらはらと 4例 くがと－赤子が泣く

【太平記】さめざめと 4例 はらはらと 17例

【平家物語覚一本】さめざめと 12例 はらはらと 32例

◎笑う描写

【義経記】どつと 2例

【太平記】からからと 15例 にこと 2例 につこと 1例

どうと 6例 どつと 4例

【平家物語覚一本】からからと 1例 どつと 6例 はつと 2例

『義経記』は他の二書に比べると、泣く・笑うに関する擬音語・擬態語が非常に少ないことがわかる。特に泣く際の擬音語・擬態語が少ないことが注目される。先に見たように、本文の分量の割には『義経記』の擬音語・擬態語の出現頻度は少なくない。また、「もっともはなやかな

武将としての活躍場面は『平家物語』にゆだねたかたちで、その前後に不遇な生い立ちと悲劇的な末路とが、この書の主題となっている」¹⁶と言われるように、『義経記』は悲劇的な場面が多く、涙に関する描写も多いのだが、以下の例 24 のように、擬音語・擬態語を用いずに描かれることが多い。擬音語・擬態語を伴う例 22・23 とともに以下に示す。

例 22 〈前略〉心安からずして、失ひ参らせん事の悲しさよ」と、さめざめと泣き給へば、侍共これを見参らせ候ひて、「さすがに〈中略〉」と皆袂を濡らしけり。 (巻七)

例 23 〈前略〉知人にこそなり奉らめ」と仰せられけると、聞きあへず、つと御前に参りて、御袂にとりつき参らせて、はらはらと泣き、「あら無慚や、 (巻二)

例 24 〈前略〉預かりたく候へ」と、申しも果てず袖を顔に押し当てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も皆鎧の袖をぞ濡らしける。 (巻五)

『義経記』では、擬音語・擬態語を使った生き生きとした描写は、武士たちの勇猛なあるいは軽快な動きを表現するために用いられており、泣く描写にはほとんど用いられていない。

笑いに関しては、『義経記』には個人の笑いは 1 例もなく、集団の「どつと」も 2 例しか見られない。『平家物語』(覚一本)にも少ないことから、笑いの擬音語・擬態語は『太平記』の大きな特徴であると言える。

16 『日本古典文学大事典』「義経記」の項。執筆は梶原正昭。

6 まとめ

『義経記』の擬音語・擬態語は、『太平記』や『平家物語』（覚一本）と比べて、決して少なくはなく、その使われ方も二書とは異なる点が多々見られた。大きな違いの一つは、漢語系の擬音語・擬態語がほとんど見られないことである。和語系の語に関しては、軍勢の動きや音声を表す擬音語・擬態語が非常に少ないことが挙げられる。その一方で、個人の動きを表すものは種類も数も豊富であり、『太平記』において、軍勢の動きや音声を表す擬音語・擬態語が多かったことと対照的である。頻度が高かったのは「がばと」「からりと」「するりと」「つと」「ひやうど」「ゆらりと」で、『太平記』『平家物語』（覚一本）よりも多用されていた。

合戦に関わる描写では、太刀など打ち物に用いられる擬音語・擬態語は、二書に比べて種類も数も圧倒的に多く見られた。打ち物の表現には、「がしと」「がばと」「ずばと」「づんと」のような勢いのある力強い表現が多く、「するりと」「つと」のような素早く滑らかな動きも見られた。弓矢に関しては、射る描写のほとんどが「よく引いてひやうど射る」という定型的表現になっている。一方、敵と組み合う動きに関しては、騎馬の戦いがほとんど描かれていないためか、「むずと」組むという表現は1例もない。

合戦以外の動きでは、二つの特徴が見られた。第一点は、「がばと」「むずと」など、武士の力強い動きを表す擬音語・擬態語の多用である。力強さは、打ち物の表現にも見られた特徴である。第二点は、「するりと」「つと」「ゆらりと」の多用である。「入る・出づ」などの移動を描写する際に、素早くためらいのない動きを表す「つと」が多く用いられ、さらに、義経の動き場合には「するりと」を用いて、義経の滑らかで素早く軽快な動きを表現している。また、「ゆらりと」は軽やかな跳躍力と余裕を持った動きを表現しており、その多くが義経の動きに用いられている。

軍勢の立てる関の声や笑い声を表す擬音語については、『太平記』で多用されていたのに対し、『義経記』では非常に少なく、個人の描写に重点を置いていることが窺われる。ただし、個人の描写の中でも「泣く・笑う」といった感情を表す擬音語・擬態語は少ない。

以上の特徴から、『義経記』における擬音語・擬態語は、武士たちの勇猛な動きと素早く軽快な動きとを生き生きと表現するために用いられていることが認められた。

本稿では『義経記』の擬音語・擬態語の特徴を見てきたが、今後は『日本古典文学大辞典』の「義経記」の項に「かたちの上では曾我兄弟の仇討事件を扱った『曾我物語』にちかく」と指摘されているように、『義経記』と並び称される『曾我物語』を調査し、比較したいと考えている。いずれも個人に焦点を当てた物語であるが、擬音語・擬態語使用の面から、共通点と相違点を明らかにしたい。

【引用・参考文献】

- 市古貞次 1938 「義経記の文章」『古典研究』3巻8号
市古貞次 1959 「義経記について」『義経記・曾我物語』（私たちの古典文学12）さ・え・ら書房
角川源義 1975 『語り物文芸の発生』東京堂出版
梶原正昭 1984 「義経記」『日本古典文学大辞典』第二巻 岩波書店
梶原正昭 2000 「解説」『日本古典文学全集62 義経記』校註・訳：梶原正昭 小学館
金田一春彦 1978 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編・小学館）
小松茂人 1966 「『義経記』の人物像－特に「けなげ」と「なさけ」の倫理意識について－」『宮城学院女子大学研究論文集』28号
近藤好和 2000 「軍記物語からみた中世の武器の使用と戦闘」『軍記と語り物』36号
佐倉由泰 1997 「『義経記』の世界－恣意と視線の機構－」『人文学論集〈文化コミュニケーション学科編〉』31号（信州大学人文学部）
佐藤 隆 1999 「『義経記』諸本の展開」『義経記と後期軍記』双文社出版
島津久基 1925 「義経説話の淵源としての義経記」『国語と国文学』3巻10号
田中敏生 2004 「『義経記』の副助詞バカリとノミ－限定表現における役割分担の斜陽性をめぐって－」『四国大学紀要A人文・社会科学編』22号
利根川清 2003 「研究展望 『義経記』」『軍記と語り物』39号
中里理子 2012 「平家物語の擬音語・擬態語－延慶本、寛一本、百二十句本の比較から－」『上越教育大学研究紀要』31巻

- 中里理子 2014 「太平記の擬音語・擬態語」『白百合女子大学研究紀要』49号
- 西村知子 2005 「『義経記』版本における改訂－古活字本・製版本への展開－」『同支社国文学』60号
- 野中直恵 1997 「『義経記』の文芸世界－構想と構造との相関から－」『軍記文学研究叢書 11 曾我・義経記の世界』汲古書院
- 福田 晃 1997 「『義経記』研究の軌跡と課題」『軍記文学研究叢 11 曾我・義経記の世界』汲古書院
- 三澤裕子 1998 「幸若舞曲の表現－合戦場面の擬音語・擬態語を中心に－」『軍記物語の系譜と展開』（梶原正昭先生古稀記念論文集）汲古書院
- 藪本勝治 2014 「『義経記』の義経主従と『太平記』の護良主従」『国語国文』83巻5号（京都大学）
- 山下宏明 1972 「軍記物語と語り物文芸」塙書房
- 山本吉左右 1968 「義経記おぼえがき 文体と方法について」『和光大学人文学部紀要』3号

【稿末資料】

＜義経記の擬音語・擬態語＞

抽出したオノマトペを和語系と漢語系に分け、五十音順に整理した。
 〈 〉内は、オノマトペが表す内容（多くは、被修飾語にあたるもの）
 である。数字は二回以上現れた語に対して記した。

◎和語系の擬音語・擬態語の抽出対象

「さ（と）」のような一音節語が紛れやすくなるため、また「ひやうど」のように引用の「と」が濁音になり一語化しているものがあるため、すべて「と」を付して示した。表記が何通りかある場合は、それぞれの数を示した（例：「ずばど」「づばと」は同じ項にまとめたが、「ずばと 2/づばと」のように分けた）。また、内容の説明で「兵」と書いた場合は軍勢を指す。

調査対象から外したのは次に該当するものである。

- 1) 「ひしめく」など、接尾辞「めく」がつく動詞の形になっているもの。
- 2) 「きらきらし」など、形容詞の形になっているもの。
- 3) 「むらむら雪」の「むらむら」ように、畳語形式であっても語基部分（「群ら」など）の独立性が高く、一般語彙として副詞的・

名詞的に多く用いられているもの。

- 4) 「ちとも」のように、陳述副詞であるもの。ただし、「ちと短し」のように、情態副詞で様子・状態を表している可能性のあるものは取り上げた。
- 5) 「はるばる」など、疊語形式の後項が濁音化しており、語基部分が「はるか」のように一般語彙として意味を持つもの。例外として、「ほのほの」「さめざめ」は取り上げた。「ほのほの」は「ほの」の独立性が高く「ほんのり」など他の語形式のものがあるため、「さめざめ」は語基「さめ」だけでは意味を持たないためである。
- 6) 「あっと」「えいと」のようにとっさに語にならない音として現れたと思われるものは取った。『太平記』では、「えいや」は掛け声と考えて取らなかったが、今回は「えい」との違いが明確でなかったため取り上げた。

◎漢語系の擬音語・擬態語の抽出対象

本文で述べたように、今回の調査も『太平記』に合わせて「二字の漢語」で「同じ語根を重ねたもの」「同じ韻を持つ拍を重ねたもの」を対象とした。

〔和語系の擬音語・擬態語〕

あと2〈言ふ2〉 あつと1〈感ずる声〉 うむと〈言ふ〉 えいと2〈投ぐ・張る〉 「うつ」と〈言う〉 えいやと4〈立ち上がる・投ぐ・言ふ2〉 えいやえいやと〈言ふ=飛ぶとき〉 かさりぴしりと〈竹にとりついて渡る音〉 がしと〈刀を合はす〉 がつばと〈起く〉 がばと17〈起く3・倒る3・投げかく・投げ乗す・乗り移る・射倒す・伏す・踏む・踏み放す・飛び付く・突き落とす・長刀を捨つ・突く〉 からからと〈臍当の音〉 からりと6〈長刀を投ぐ・太刀を捨つ・弓を投げ捨つ・太刀の股寄を鳴らす・鎧元へ

引きかく・大太刀を投げかく〉 かりひしりと〈鉞、薙鎌、熊手を船に取り入る〉
きと2〈言ひて帰れ・後ろを見る〉 ぎがと〈金物が輝く様子〉 きつと〈後ろを見る〉
／急度〈参るべし〉 きらきらと〈兜の星〉 くがと〈赤子が泣く〉 ぐさと〈引っ掛く〉
ころころと〈転ぶ〉 さと4〈散る4〉 さつと7〈戸を引き開く・経を拡ぐ・兵を引く・
御簾を打ち下ろす・御簾を下ろす・烏帽子の片々を引つ立つ・幕を打ち上ぐ〉 ざつ
と〈簾を打ち上ぐ〉 さつさつと〈濡れているのを打ち払ふ〉 さめざめと3〈泣く3〉
静々と3〈返す・歩む・出づ〉 しとしとと〈打つ〉 しどろなる／に2〈草摺・座敷〉
ずばと2〈太刀を抜く・打ち飲む〉／づばと〈刺し貫く〉 すりりと14〈長刀を差し
出だす・侍所に入る・出る・上る・縁に上がる・落ち・下る・漕ぎ入る2・引き寄す・
引く・渡る・引き廻す・通る〉 だうと〈寝る〉 だぶと2〈海へ入る2〉 たぶたぶと〈切
る〉 たらたらと〈水が垂れる様子〉 ちと〈短し〉 ちやうと〈締める〉 ちやうど8
〈斬る・打つ4・合はす・突く・取り付け：会話の命令〉 ちやうちやうど〈弦打ちす〉
つと27〈打ち落とす・登り上がる2・上る3・御前に参る・入る4・出づ4・首を斬る・
走り入る・立つ・寄る6・射出す・射切る・刀が通る〉 つつと〈上る〉 づと〈入る〉
づんと3〈斬る2・切る〉 つぶつぶと〈言ふ〉 とうと3〈投げ上ぐ・落つ・関を作
る〉／どうど〈馬が伏す・鎧が船端に立つ・転ぶ〉 どうどうと2〈踏み鳴らす・行く〉
どつと2〈同音に笑ふ・一同に笑ふ〉 のさのさと2〈捕らる・転ぶ〉 はたと7〈斬
る2・静まる・睨む・射切る・打ち割る・声を上ぐ〉 はたはたと〈物が鳴る〉 ぱつ
と4〈大勢が時を作る・驚く＝目覚める・火が散る・退く〉 はらと〈押つ壊す〉 は
らはらと4〈涙を流す2・泣く2〉 ひと〈射かく〉 ひしと2〈臥す・履物を脱ぎ置
く〉 ひしひしと2〈風が帆に当たる・出で立つ〉 ひたと〈上る〉 ひたひたと〈上る〉
ひやうど8〈射る7・放す〉 ひやうどうと〈射る〉 ＊ひらと〈下り合う〉 ふと〈入
る〉 ふくふく〈打たる〉 ふつと9〈斬る2・切る3・射ちぎる2・押し切る・忘る〉
ぽつと〈帆柱が折れる〉 みしと〈差す〉 むずと16〈討ち入る・打つ5・居る2・居
直る・引き寄す・馬の尻に乗る・斬る・手綱に差す・取る・結ふ・手を組む〉 ゆら
りと8〈跳び上がる・飛びおる・飛び返る・超ゆ3・おる・乗り移る〉 わと2〈襲う・

喚く〉 わつと 2 〈喚く・宣ふ〉 「をつ」と 〈喚く〉

* 「ひらと」は、「底本『ひらて』とあるが、『ひらと』に改める」と注がある。

**参考：えい声 6 〈登り上がる 1・跳ねる 5〉 えいやづき 2

〔漢語系の擬音語・擬態語〕

峨々 2 〈巖石・巖〉 満々 〈海上〉 歴々 〈ある＝ありありとの意〉

*参考：漢語系で他形式のもの

惘然 〈ある〉